慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	若者の就職意識に関する国際比較研究 : 中国・ 日本の大学生を中心にして
Sub Title	
Author	杜, 新(Du, Xin)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.121- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

多くの困難がともなったであろうことは容易に想像できる。類型の導入をすすめた1955年改訂版は，現実に合わせた改訂であったとも理解できる。

『解説』では，生徒は教師の助言によって自分の教科を選ぶということに対して極めて楽観的であって，選択するという行為の難しさとその重要性の認識が十分認識されていなかった。

教科の選択という場面でこそ，進路指導と教科指導は継続的な一体的なものとして機能を果たすことができたはずである。類型化し教科の選択が縮小してしまえば，進路指導は，「出口」での「振り分け」とならざるをえない。

昨今の「個性化」「多様化」の議論を分析する上でも，生徒による選択と教師の指導の意味を改めて考え直す必要があるだろう。

注

1) 藤本喜八，中西信男，竹内登規夫，『進路指導を学ぶ』有斐閣，1988，p. 4.
2) 文部省『進路指導の手引き—高等学校ホームルーム担任編』日本進路指導協会，1983, p. 3.
3) 藤田晃之『キャリア開発教育制度研究序説』教育開発研究所，1997, pp. 77-78.
4) 勝田守一「知性の訓練と道徳」『勝田守一著作集』第4巻，国土社，1972, p..535.
5) 池上正道，梅原利夫「中学教育課程における選択制の考察」『カリキュラム研究』創刊号，1992, p. 94.
6) 山崎保寿，『高等学校における選択制の拡大と進路指導』協同出版，1996など.
7) 角田一郎，『高等学校教科課程の理論と実際』興文社，1948, p. 128.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

若者の就職意識に関する国際比較研究
——中国・日本の大学生を中心にして

杜　　新*

1. 研究内容:

中国と日本は，現在出生率の低下，人口構成の中での若年人口の低比率，晩婚化及び急速な老齢化などの現象が同じく存在している。経済発展とともに，少子化子供がより良い家庭環境のもとで育てられているので，物質の面でも教育の面でも豊かで充実する一方，中国では親の過保護のもとで現在の若い人が自己中心で，虚栄心が強く，対人交流障害などが問題とされてきている。日本でも家庭内暴力，いじめ，勤労意識低下などなどの問題が指摘されている。

確かに現在の若者はある意味で満たされている世代であるが，精神的な面では，親世代とどのように違ってきているだろうか。仕事をする際にも，いわゆる伝統的な価値観，たとえば自分の存在が誰かの為に役立っているというような考えを持っているのだろうか，様々なものを前向きに背負いその責任を果たしていくといった充実感があるのだろうか，また共通の目的を達成する為に自分の役割を認識して仕事を行うことを素晴らしいと思っているのだろうか。

さらに，家庭と子供の教育に関して，昔「親の背中を見て子は育つ」という時代があったが，現在の若者の就職意識の中では，家庭や親の意見はどんな役割を果たしているのだろうか。また，若者から見

れば，学校や社会が仕事することの充実感，心の豊かを感じさせることが出来る機会と場を提供してくれているのか。もしその機会・場で若い人は自己責任を伴った意志決定が出来れば，本当に魅力ある社会を 21 世紀に向けて創り上げて行くことが出来るであろう。

以上の問題意識から，今回の国際比較調査の試みとして，中国と日本の両国で，大学生の就職意識の現状を考察することを通して，それぞれの問題を明確化し，その現象の背後の構造的問題を究明しようとしている。

本研究では，質問紙およびインタビュー調査を通して，次の幾つかの課題に関する考察を行うことにする。

①少子少産社会における中国と日本の若い人の仕事や就職に関する意識の様態を把握し，両国の比較を通して，それぞれの就職意識の形成・構造・変動の特徴を考察する。

②本論文は若い人の就職意識やキャリア発達を考察することで，両国社会の社会変動，特に家庭，人口構造，学校教育，及び産業構造の変動といった要因が，どのように若い人の就職や進路選択に影響を及ぼしているのかを究明したい。

③現代の若い人のキャリア発達の実態を究明するうえで。特に大学時代は現在の青年のキャリア発達のどの段階にあるのか，どのような様相を呈しているのかを明らかにしたい。

2. 今の進行状況：

いままで相関する研究分野の先行研究の成果を整理している。また一部のインタビュー調査（4 月に中国）および質問紙予備調査（7 月に東京）が行った。

予備調査の概況：

①考察内容：

・少子化社会における中国と日本の若い人の仕事や就職に関する意識の様態を把握し，比較を通して，それぞれのメリットとデメリットを発見，分析する。

・本論文は少子化を若い人の就職意識やキャリア発達の一つの影響要因として考え，この要因は家庭・学校教育，及び社会の産業構造の変動といった経路を通して，どのように若い人の就職や進路選択に影響を及ぼしているのかを究明したい。

・現代の若い人のキャリア発達の実態を究明すること。特に大学時代は現在の青年のキャリア発達のどの段階にあるのか，どのような様相を呈しているのかを明らかにしたい。

②方法：質問紙調査，面接調査，分析方法：単純集計，三重クロス集計

③調査概要

時間：2002 年 7 月 4 日午前 11 時頃から約 25 分間

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス

人数：男性 95 名，女性 82 名，合計 177 人

④単純集計の結果

Ⅰ．家庭背景：

・子供数：

一人子が少ない。

・親の学歴と家庭状況と仕事:

父親と母親は大卒が一番多い。家庭状況は「平均的な家庭」を選ぶのが多い。また，職業からみれば，父親の職業は「民間会社の社員」の方が多い。母親は専業主婦の方が多い。

・親との関係:

両親と関係は全体的には「だいたいうまく行っている」。その中，母親との関係はより良い。「親がデザインしてくれた人生を歩きたい」に対して「そう思わない」というのが多い。親とコミュニケーションを「よくしている」のが多い。自分の意見は親のと異なるならば，どうするかに対して，「できるだけ親を説得する」の答えが多い。

親の希望と子供の育て方:

人生に対して，親が「仕事に成功してほしい」，「平凡だが幸せな生活をしてほしい」「頑張る人間になってほしい」，「他人に思いやりのある人間になってほしい」などが多い。一方「金持ち」，「有名人」と「権力者になってほしい」を選ぶのは少ない。仕事に対して，「特に要求がない」と「私の就きたい職をさせてくれる」のが多い。「要求がある」の中に，「公務員」になってほしいのが多い。自分の就きたい仕事は親の希望と違う場合，「自分の思う通りに仕事を決める」のは多い。親の育て方について，「幸せに生活できるように育ててきた」との答えは一番多い。その次は「道徳や教養のある人になるように」のが多い。

Ⅱ．専攻と学校教育について:

・今の専攻について:

専攻の選択と職業: 今の大学と専攻を選択するとき，将来の職業に関しては，「だいたいの方向は決めていた」という学生が多い。今の専攻が「まあまあ好き」な人が多い。好きではない理由としては，「実際の内容は想像とは違う」と「専攻の内容はつまらない」及び「自分の趣味には合わない」のがその第一，二，三位を占める。

・専攻知識の適用度:

専攻の知識は将来の仕事に対応できるかどうかについて，「不充分」と思う人が多い。

専攻以外の知識は「どんな知識や能力が必要なのか」に対して，「外国語」と「社交の能力」が最も必要だと思われている。

・大学教育について:

「小人数の教育形態で，発表や論文の表現技法などを教育すべきだ」と「専門科目に限らず，人文・社会科学の一般教養を養うべきだ」と考えている学生が多い。

Ⅲ．就職情勢と将来の仕事に関する考え:

・アルバイト:

ほとんどの学生はアルバイトをしている，あるいはした事がある。週に 10 時間アルバイトをしている比率が一番多い (17.6%)。アルバイトをする目的としては，「小遣いを得るため」と「社会的な経験を積むため」がその第一，二位に占めている。

自分の就職（職種，形式，重視する面）と就職意識の形成:

就きたい職業は「外資や合弁会社の社員」と「民間会社の社員」を選択したのがわりと多い。仕事について意識しはじめたのは何時なのかという質問に対しては，51.1% の人は「高校卒業する前」と答えた。どんな形で働きたいかという質問には，「正社員として」という答えが圧倒的である (85.6%)．また，

仕事を選ぶ際，何を重視するかに対して，「仕事の内容」，「安定性」及び「収入」，「将来性」「人間関係」や「環境」が重視されているが，「会社の規模」がそれほど重視されていない。

・フリーター，失業及び職業の社会地位に対する見方：

フリーターに対する見方は，「就職状況が悪いので仕方がない」と思う人が多い。一方フリーターをするのは「自分探しのためにはいいことだ」と「かっこいい」と思わない人が多い。というのはフリーターをするのはしょうがないことで，大学生のこれに対するマイナスなイメージを持っているのが多いようである。失業に対しても，これから増えるという悲観的な態度を持っている方が多い。職業を社会的な地位が高いと低いという区別があると思う学生は71％を占めている。さらに社会的地位が高いと思われる職業は「専門職」と「外資系の社員」が挙げられる。

・就職情勢：

就きたい仕事は卒業する時に就けるかどうかについて，「分からない」と答える人が一番多い(65.1％)。

・仕事をする目的：

人々が働く目的は何だと思うかという質問に対して，「収入を得る」と思う学生が多い。

自分の仕事をする目的を聞くと，「経済的に家族から自立するため」のは83.5％，「自分の能力を活かすため」及び「自己実現のため」の答えが多い。

・悩みの相談相手：

就職には悩みがある場合，「親や兄弟姉妹」と「友人」の意見が一番大事だと思っている。

・理想な職場

「人間関係の良い職場」(91％)，「そこで働くことを誇りを感じさせる職場」と「公平に待遇してくれる職場」が理想的な職場だと思われる。

・やる気：

どんな場合にやる気があるかに対して，「仕事内容が面白い」と「自分の能力が活かせる」時に，やる気が出ると答えている。

・転職意識：

仕事に不満を持つ時，「機会があれば転職する」と思う人が多い(62.1％)，「できるだけ同じ職場に我慢する」と答えるのはその次に23.2％。

Ⅳ．仕事と理想な生活：

「どんな生活を過ごしたいか」に対して，「仕事の中で人生の充実感を持ちたい」(79.1％)，「愛する人と一緒に幸せな家庭生活を楽しみたい」(75.7％)及び「趣味を育てて余暇時間をもっと楽しく過ごしたい」(71.8％)学生が多い。幸せな生活を送るための条件としては，「よい人間関係を持つ」，「愛する人と一緒に」と「素晴らしい友情を持つ」ことは大事と答えている。仕事と個人生活との関係について，「両方とも大事」だと思うのは54.8％で一番多い。

Ⅴ．外資系や外国での就職について：

外資系会社で就職を「希望する」のは29.9％で，最も多い。外国で就職するチャンスがあれば，「行きたい」人が54.2％で，「場所や条件を考えて決める」人が24.9％を占めている。なぜ外国へ行きたいかという質問に対して，「良い仕事をするチャンスがあるから」と答える人が多い。

Ⅵ．将来の就職状況の予測

30歳になった時に何をしているかに対して，「正社員として仕事をしている」と思うのは55.9%で一番多い。

――全体のイメージとしては，被調査者の中，就職意識の形成は高校時代からの人たちが多い。自分の専攻が好きな人が少なくない。また就職の見通しに対して，わりと楽観的，具体的に仕事の選択に関する考えは現実的・確実的（フリーターを好まない，会社の規模が重視されない，面白い仕事，正社員，良い人間関係が求められる）などが多い。彼らの就職に対する親の考えはより「伝統的」（平凡だが安定な仕事）な印象がある。

――その内実はどうであろうか。質的調査を通して調べることも重要になってくる。

3. 今後の研究計画：

仮説：

①就職意識の実態をいうと，中日大学生ともに就職意欲が高いが，日本の大学生は定着意識が中国学生より強い。就職する際中国の学生はより「待遇」（収入・福祉など）を重視するだろう。在学中アルバイトをする比率は日本の学生のほうが高いだろう。

②少子少産の職業意識に対する影響経路から見れば，中国の若い人は家庭の影響が強い，これに比べて，日本の若い人はむしろ経済状況の変動，特に景気変動を通して影響を受けている。

③キャリア発達の段階をみれば，日本の学生に比べて，より成績重視する環境の中に置かれている中国の学生は実社会に対する認識は未熟なため，職業意識の発展，特に職業に対する認識，自らの職業に対する探索段階がより長く，生涯の職業の確立がより遅いだろう。

今後の研究では質問紙調査と面接調査を通して，以上の仮説をめぐって考察，検証，分析しようとしている。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

空間性に力点をおいた，都市社会の解明のための理論研究
都市論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究

福　田　光　弘*

昨年に引き続き第一の研究課題として，空間性に力点をおいた，都市社会の解明のための理論研究を行うことをあげ，H. ルフェーヴルの思想を中心に考察を続けてきた。本年度は特に，英語圏でのルフェーヴル評価を検討することで，昨今の空間に関する議論の中心課題を見出すことに努めた。それにより，時間-空間という切り離せない二つのもののうち，私たちは時間を特権視しがちであることの根拠を考察してきた。こうした時間の特権視について，三つの点から考察する論案を立て，それにより「空間論的転回」についての一つの説明を試みた。その三つとは以下の通りである。第一に，現代社会において空間とは，近代資本主義生産様式により生産されたものであること。第二に，時間は空間を生産するさいに手段としての役割を担うこと。第三に，人々の空間にたいする認識も，空間が生産されるのと同様に生産されているということ。